2023年2月19日　中野教会日曜礼拝

　　　　　　　　　　　**「エルサレムの見張り人」**

聖書箇所：エゼキエル33:1-11

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はエゼキエル書の33章から学びます。この章は、共同訳聖書では「見張りの務め」という小タイトルがつけられています。この「見張り人」については日本基督教団の戦争責任に関する告白文、所謂「戦責告白」にて使用された言葉です。日本のクリスチャンは主なる神より与えられた「見張り人」の役割を果たせなかった、という文脈で使われています。この「戦責告白」における「見張り人」という言葉の使い方に潜む問題性についてものちほど触れます。

　まず、エゼキエルという人物や当時の時代背景について申し上げます。エゼキエル書1:1には「第三十年の第四の月の五日、私がケバル川のほとりで、捕囚の民とともにいたとき、天が開け、私は神々しい幻を見た」といわれています。エゼキエルが幻を見て、語ったのはバビロンの地であったといわれています。エゼキエルはエホヤキンが新バビロニアによって捕虜となり、バビロンに連れて行かれた第一回バビロン捕囚の時、一緒にバビロンに連れて行かれた人々のなかに居た、と推測されています。ユダ王国の滅びが始まった段階です。第三十年の解釈は諸説がありますが、ヨシヤ王の申命記改革から30年またはエゼキエルの年齢30歳というのが説得性のある説のようです。BC592年、第一回バビロン捕囚の5年後です。エゼキエルは祭司でしたから年代を数えるのにヨシヤ王の申命記改革を出発点に置くのもあながち変な解釈ではありません。「エゼキエル」の名前は「神が強くされる」の意味でエゼキエルの時代背景を考えると意味のある名前です。ゲバル川とはユーフラテス川の支流でバビロンを流れていた川です。3:15に「テル・アビブ」という地名がでてきますが、同一の場所と推定されています。考古学的発掘によってその地に捕囚の民が集団生活していたことが明らかになっています。いまのテル・アビブはここから名前を取ったのだと思われます。

　エゼキエルの時代はユダ王国が新バビロニアによって滅ぼされる時代です。新バビロニアの王は新バビロニア第2代のネブカドネツァルII世の時代です。ユダ王国の王は申命記改革を行ったヨシヤ王がBC609年メギドで戦死してから、そのエホヤキン、更にその子エホヤキム、そしてユダ王国最後の王ゼデキヤという流れになります。エホヤキンの時代に第一回捕囚となりましたから、エゼキエルはその時以降はバビロンの地に居て、遠くエルサレムを思いつつ幻を見た、ということになります。この時代は、預言者エレミヤの時代と重なっています。エレミヤの方が少々早く預言者活動を開始しています。エレミヤの召命はBC627年で、エゼキエルが幻を見たのがBC592年ですから、35年の差があります。両者の大きな違いは、エレミヤは、ユダヤの地で預言者として活動しましたが、エゼキエルはバビロンの地で幻を見ています。ユダ王国の滅亡はBC587年ですが、エレミヤはそのまっただ中のエルサレムで預言していました。その預言はユダ王国の滅亡は必然だ、というものです。エレミヤ書38:17-18では「そこで、エレミヤはゼデキヤに言った。「イスラエルの神、万軍の神なる主はこう言われる。もし、あなたがバビロンの王の将軍たちに降伏するなら、命は助かり、都は火で焼かれずに済む。また、あなたは家族と共に生き残る。/しかし、もしバビロンの王の将軍たちに降伏しないなら、都はカルデア軍の手に渡り、火で焼かれ、あなたは彼らの手から逃れることはできない」と言っており、明らかに降伏の勧めです。エレミヤ60歳の時です。他方、エゼキエルはバビロンの地でこのユダ王国の滅亡の時を迎えましたが、その時の預言が今日の聖書箇所「見張りの務め」となります。エゼキエル36歳の時です。

　ではこの「見張り人の務め」のところを見てみます。33:2-3では「人の子よ、あなたの同胞に語りかけ、彼らに言いなさい。わたしがある国に向かって剣を送るとき、その国の民は彼らの中から一人の人を選んで見張りとする。彼は剣が国に向かって臨むのを見ると、角笛を吹き鳴らして民に警告する」と言っています。「人の子」というのはエゼキエル書では預言者エゼキエルへの神の呼びかけの言葉です。「その国の民」は神に選びの民イスラエルのことですが、その民の中から「見張り人」が主なる神によって、選ばれるのです。剣は言わずと知れたネブカデネツァルの軍隊です。バビロニアが総攻撃のために軍を動かす時、見張り人は「角笛を吹き鳴らして民に警告する」と言われています。何のための警告でしょう。降伏の準備をするか、逃げる準備を開始するか、でしょう。どう考えても、戦いの準備をせよ、という勇ましいことの為ではなさそうです。その意味で、エゼキエルはエレミヤと同様の意見を持っていたのであろう、と考えられます。降伏のあと、反抗的態度を維持するか、従順な姿勢を示すのか、という点については、宗教的・文化的な分野については、自分たちの伝統を維持するのだ、という決意が秘められている、と想像されます。中でも、ヤハウェ信仰の根本にかかわるような宗教的事柄については死を賭してもこれを守り抜く、という覚悟があったのだと思います。

　このあとの叙述にも重大なことが記されています。33:4-6です。「角笛の音を聞いた者が、聞いていながら警告を受け入れず、剣が彼に臨んで彼を殺したなら、血の責任は彼自身にある。彼は角笛の音を聞いても警告を受け入れなかったのだから、血の責任は彼にある。彼が警告を受け入れていれば、自分の命を救いえたはずである。/しかし、見張りが、剣の臨むのを見ながら、角笛を吹かず、民が警告を受けぬままに剣が臨み、彼らのうちから一人の命でも奪われるなら、たとえその人は自分の罪のゆえに死んだとしても、血の責任をわたしは見張りの手に求める」とあります。見張りが、その任務である警告をしなかった場合、民のうちの一人でも命を失う事態が発生したら、見張りには血の責任が求められる、というのです。

「血の責任」という言葉はヨシュア記2:19で既に使用されています。「もし、だれかが戸口から外へ出たなら、血を流すことになっても、その責任はその人にある。我々には責任がない。だが、あなたと一緒に家の中にいる者に手をかけるなら、その血の責任は我々にある」と述べられています。ここは遊女ラハブに探索の使者が約束をする場面であり、主なる神の前での誓いの表現です。主なる神への約束をたがえた場合は、主なる神の怒りの結果はこれを受けざるを得ない、ということを意味しており、具体的には命をとられることです。見張りの使命を果たさなかった責任は自らの命と引き換えになるほど重大である、ということを意味しています。また新約にも出てきます。マタイ27:25です。「民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある」」とあります。ここは、主イエスの十字架の個所のところであり、その責任が自分たちユダヤ人に降りかかってもしょうがない、と宣言しています。預言者という民をリードすべき使命を与えられた人間は、その使命を果たさなかった場合、その責めを、自分の命をもって果たさなければならない、というのはモーセ以来のイスラエル信仰の伝統です。

この考え方を別の角度から言い換えたのが33:8-9です。「わたしが悪人に向かって、『悪人よ、お前は必ず死なねばならない』と言うとき、あなたが悪人に警告し、彼がその道から離れるように語らないなら、悪人は自分の罪のゆえに死んでも、血の責任をわたしはお前の手に求める。しかし、もしあなたが悪人に対してその道から立ち帰るよう警告したのに、彼がその道から立ち帰らなかったのなら、彼は自分の罪のゆえに死に、あなたは自分の命を救う」と言われています。相手が悪人であっても彼に警告を与えるべきにもかかわらず、何もしなければ、その責めをあなたは負わなければならない、と言っています。先ほどの部分が預言者の自分の民イスラエルへの責任を言っているとすれば、こちらは、主なる神から離れ、罪を犯したイスラエルの民を悪人に見立て、それに対する警告をしなかった預言者を問題にしているのです。これはエレミヤ流に言えば偽預言者です。

そして極めて重要なのは33:10-11です。「人の子よ、イスラエルの家に言いなさい。お前たちはこう言っている。『我々の背きと過ちは我々の上にあり、我々はやせ衰える。どうして生きることができようか』と。/彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」と言っています。自分たちの過ちの為、もう望みはない、と言っているイスラエルの民に対し、主なる神はイスラエルの民である悪人が死ぬのを喜ばない、立ち返れ、主なる神に、と言っています。イスラエル信仰における主なる神は、その民に、神に背く自由さえお与えになりました。しかし、主なる神は、その背きの民が、再び神の道に立ち帰ることを望まれています。この「立ち帰れ」ということば「shu:b」が新約で「悔改め」となった言葉です。

11節で述べられていることの含意としての主なる神の期待は重要です。もう生きていくのは無理と言っている悪人に対し、主なる神は「生き長らえよ」と呼びかけているのです。それは、戦争に敗北しても良い、民が生き延びることの方が重要なのだ、というメッセージを、預言者エゼキエルを通して語っていることです。この1500年後、ローマに対する反乱を契機にイスラエルの民が決定的に、世界を放浪する民となった歴史を想起すると、この「戦争はするな。妥協してよい。時の権力に従属する民となっても良い。他国で住む地になじまない民として非難されるようなことになっても良い。いかなることをしても生き延びろ。それが主の道に立ち返ることだ」というイスラエル信仰に立つ民の生き方を示唆しているようにも思えてきます。

　実は、33:1-11の言葉は、エゼキエル書の前の方で既に基本的には語られていることです。3:16-21です。3:17だけお読みします。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの家の見張りとする。わたしの口から言葉を聞くなら、あなたはわたしに代わって彼らに警告せねばならない」とあります。エゼキエル書の1-3章はいわばこの文書の序編に該当しますから、エゼキエル書の重要部分を簡潔に言い表しているのだと理解することができます。こちらには、悪人について同様のことを述べた後、正しい人についても述べていますが、内容は基本的に同じことを言い換えているに過ぎません。

　もう一点述べておきたいことがあります。言葉の問題です。今まで述べてきたところでの「見張り人」という言葉は「tsa:pa:」という「見つめ続ける」という意味の言葉が分詞になり、人を指す言葉になっています。「見張り人」と訳されている言葉にはもう一つあります。「sha:mar」という言葉ですが、こちらは、本来は、「保つ」英語ではkeepという意味の言葉ですが、「見つめ続ける」という意味で「見張り人」という意味の言葉にも使われています。用例としてはイザヤ書62:6があります。「エルサレムよ、あなたの城壁の上に／わたしは見張りを置く。昼も夜も決して黙してはならない。主に思い起こしていただく役目の者よ／決して沈黙してはならない」とあります。こちらは第三イザヤの部分であり、エゼキエル書より50年以上後の文書です。この章は「シオンの救い」とタイトルがつけられ、イスラエルの再建の時に城壁の上に見張りをおいてシオンの丘の再建を見守らせよ、と言っているところであり、預言者が「見張り」の役目を負ったエゼキエルのような場合とはことなります。もう一か所「sha-mar」が「見張り」の意味で使用されている箇所を見ます。エレミヤ書51:12です。「バビロンの城壁に向かって旗を立て／見張りを強化せよ。見張りの者を立て、伏兵を置け。主は思い定め、それを実行される／バビロンの住民に告げられたことを」とあります。ここは、エレミヤ書の最後の方で、主なる神のバビロンへの復讐の裁きについて述べたところです。主なる神の裁きの補助者です。エゼキエル書の「見張り」とは大きく異なります。

最初に申し上げた通り、この「見張り人」という言い方は戦責告白に使われている言葉です。戦責告白とは過ぐるアジア太平洋戦争についてキリスト者として採るべき態度を採らなかったとして、その責任を告白するものです。悔い改めの告白です。1967年の日本基督教団の戦責告白のうちこの「見張り人」の箇所をお読みします。「まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります」とあります。日本のキリスト者は「見張り人」の役割を果たさなかった、ということを悔い改める、という内容です。同盟教団の戦後70年宣言でも「ここに私たちは、国家に対して「見張り人」として立てられたことを自覚し、主に代わって国家に警告を与えることによって、神の国の拡大のために、私たちに与えられた宣教の使命を果たして行くことを表明します」とあります。

この告白・宣言には強い、疑問があります。日本基督教団の場合、戦責告白に言う「見張り人」の役割を果たさなかった、と言う程度のことではなく、積極的に戦争協力しています。1944年の日本基督教団統理富田満の植民地クリスチャンへの声明をみると、大東亜共栄圏を讃え、天皇制としての国体を守り、その発展を願い、欧米諸国のアジア人蔑視と戦い植民地解放を果さねばならない、と呼びかけています。右翼国粋主義と全く変わりありません。エゼキエル書の言う見張りの務めは、自国民の罪を指摘し、時の政治的・軍事的指導者とそれを支持する多数の民の声に抗して、軍事的敗北を勧め、自分たちの信仰の道を確保することだけに思いを致す孤高の預言者の姿にあります。戦前・戦時中の日本基督教団の指導者たちに、そのようなエゼキエルやエレミヤの苦悩の姿を見ることは全くできません。戦後、20年以上たってから韓国のクリスチャンからの強い批判に答える形で「戦責告白」を、教団の決議ではなく議長声明に止めざるを得ない形で出すことにした日本基督教団の指導者たちがエゼキエル書の「見張り」のことを云々するのは片腹痛い、と言わざるを得ません。神様は、あなた達を、そのそも預言者の使命を果たせる人として期待はしていなかったのではないか、と皮肉も言いたくなります。

同盟教団の場合は、当時のキリスト教会の指導者に関連して、見張りの務め、を言うのではなく、戦後の我々の使命という文脈でこの言葉を使用していますが、すぐる戦争における教会指導者の態度に対する徹底的批判と、それを許した、自らの信仰姿勢に対する自己批判、悔い改めがなくしてこの言葉を軽々しく言ってはならない、と思います。戦争は必ず、大義名分を掲げます。そこに潜む巨悪の嘘を見抜く力は、エゼキエル、エレミヤの世間の大勢に抗しても主のメッセージを伝えるという覚悟を必要とします。一般の信徒は、世間の有様に妥協しなければ生きていけません。しかし、指導的立場にある人は、一般信徒には妥協的態度を採ることをやむを得ないことと認めつつも、自らは、本来あるべきことを貫く最大限の努力をすることが求められているというべきです。イスラエル信仰の根本には共同体の指導的立場にある人間には特別に高い責任が求められている、という考えがあります。その人間は、自らのプライドとか、民族の誇りとか、そういうことではなく、限界状況の中では自らの命を身代わりにして、民が生き長らえる道を追求するという覚悟が求められているのだ、ということです。

第二次世界大戦に関連して、戦勝国のキリスト者の責任も重大であり、正義の戦争をして勝利した国の国民としての誇りを述べるなどというのはキリスト教の、イスラエル信仰の基本に反します。なぜ、この悲惨な結果をもたらした戦争を回避する道を示すことができなかったのか、自らのキリスト教信仰の自己点検が強く求められるのです。ナチスの横暴を見ていられないから戦争を始めた、などというのはキリスト教信仰とは無縁です。

第二次世界大戦は、先進帝国主義国家と後進帝国主義国家の経済的市場をめぐっての争奪戦という側面を強く持っています。確かに、日本のクリスチャンはアジア諸国への侵略という日本の政府・軍部の戦略に全面協力した責めは重大です。しかし、欧米のクリスチャンも自らの植民地を確保し、市場拡大を意図した政治的・軍事的進出を応援していたのです。先進帝国主義国家は既得権があり、それを守るという姿勢が基本であるのに対し、後進帝国主義国家の方はその既得権を突き崩す、という姿勢にならざるを得なかったため、より狂暴な方法を採る結果となった、ということなのです。戦争は、勝利するとすべての罪は不問に付され、敗北するとすべての罪が洗いざらい明らかにされる、という極めて不公正な態度がまかり通ります。しかし、神の言葉は、戦争当事国はすべて、罪の塊のようなことを行っており、それらの国にあるキリスト者、イスラエル信仰の正当な継承者は自らの政府に対し、「正義の戦争はない。主なる神が認めているのは非暴力的抵抗のみである」というイスラエル信仰の到達点の基本を貫くべきなのです。

（ご在天の父なる御神様、今日のひとときを感謝申し上げます。エゼキエルへの主の御言葉を通して、見張りの務め、がいかなるものであるのかを学びました。すぐる戦争の歴史を振り返り、当時のキリスト教会の指導的立場の人々の罪、それを支え、つき従っていった我々信徒の罪、更には共同体としての日本国民の指導的立場にあった者の罪、これを積極的に支持していった多くの国民の罪、更には戦勝国のキリスト者の罪にまで思いを致す機会となりました。放置すると人間は必ず、戦争をします。平和は、作りだし、それを守る努力が必要です。懸命な祈りと働きが我々キリスト者に期待されています。これは、主なる神の期待です。我らの救い主、主イエスのみ名により祈ります。アーメン）